

社会福祉法人 佑啓会



# 佑啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学会

〒290-02 市原市今富1110-1

☎0436-36-7611

発行所 里見吉英

編集者 三股金利

育成会関東大会に  
参加して  
宮嶋 龍雄

第二十八回精神薄弱者育成会関東甲信越大会が、七月十九日、二十日、神奈川県横浜市で開催され、家族会を代表して大井副会長と共に参加しました。大会は六分科会に分けられ、私達は、第五分科会(テーマ・親の会の活性化と広報活動)に参加しました。

横浜市教育局文化センターには関東甲信越各地から関係者五百二十余名が集い、盛大に開会されました。会場は熱気に溢れ、関東地区親の会の組織の大きさとパワーに対する驚嘆からのスタートとなりました。提案は、新潟県浦川原手をつなぐ親の会々長藤田氏による「僻地にも平等な施策を」、「人権と尊厳の確保」、「会員の意識改革により大きな組織作り」等で、舞台は新潟県の人口四千五百人の開村、対象者三十五名、六年前に手をつなぐ親の会を組織して活動を始め、今では通所作業所の開設もなされ、春秋の花植え作業、年二回の機関紙発行、親子一泊研修会等の活動を行っているそうです。恵まれない地域での小さな組織でありながら、熱心な活動により町役場の行政を動かす、通所作業所開設に漕ぎつづける等、数々のファイトに感ずるところがありました。また、これ等の苦労はすべて入所施設以前の苦労であり、地方ではまだまだ福祉行政が行きとどかず随所に、このような光景が見られることを、改めて痛感しました。

親として何か手助けが出来ないと模索するでしょう。同じように我が子がふる里学会で、自分の能力の向上を目指し、あるいはその子なりに生活する努力をしている時、親としても何らかの援助が出来るればと思うのは私だけではないはず。それが親としての義務なのかも知れません。

施設生活を送る私達の子供がより良き人生を送れるよう、家族会会員が結束し頑張ろうと、意を強くした研修でした。

(家族会々長)

「何で僕達だけ仕事しなくちゃいけないの。」家族のない〇君は、県省に入る度に、募っている女子職員をつかまえては、思春期を迎えた少年が親におもいつき反発するように彼なりの主張をしてきます。皆がいなくなった後でも農作物の収穫や、張ったばかりの芝への灌水等誰かがやらねばならぬ仕事があるのは一般家庭と同様です。「みんな、家でゆつくりしている。だから僕達もゆつくりするんだ。」とさらに彼の訴えは容赦なく続きます。学舎の長期県省はまずこういった重い雰囲気の中で暮らすことになります。

家族のない利用者は三名です。県省中、それぞれに何らかの思い出がでるようキャンプや外食、花火等様々な企画を実施しております。しかしながら、そう簡単に、家庭で味わう安堵感を醸し



飯田 俊男

出すまでにはいかなない現実がそこにはあります。表面的な欲求は満たされても心の欲求は、簡単に満たされないうです。

「なんで自分達だけ」とクサル〇君を見る度に、一般家庭でも休日にはダラダラと過ごすだけでなく洗濯や掃除、農家の人は作物を収穫したりとそれぞれの役割があることを理解してもらおうと話しますが、施設生活が長く家庭の味を知らない彼にとって、そのことを理解するのは、無理なようです。

こういった家族のもとに帰れない人達を何とかしたいと検討しましたのがホームステイ・ボランティアです。一泊でも彼等を一般家庭で受け入れてもらい生の家庭での体験をさせたいというのが目的です。これに関しては、受け入れ先の開拓が十分なものではなく、現在は、入所者の家族にお願いして実施しております。施設では問題のない彼らも実際の家庭の中では、どのように振る舞えばよいのかかわらず、受け入れて下さる家族に迷惑をかけることも多かったです。また、ご家族にとっても障害者を抱えながらのボランティアです。その負担は大きなものがあります。そういった状況から、今回の県省では佑啓会の会長(里見施設長の父)自ら協力して頂き一名の寮生が一泊でお世話になって頂きました。施設長宅というところもあり本人は、大分緊張した様子でしたがいろいろな職員にその時のことを自慢気に話してくる表情には実にすがすがしいものがありました。

一方、学舎ではこの県省を利用して通所部に在籍する方達に入所してもらい、家族に休息の場を提供することを目的としたケア(レスパイトケア)も実施しております。このケアにつきましましては本人たちは、旅行や合宿程度に思っているらしくその表情からも我々や

親御さんが心配するほどのものではなく、かえって逞しさが感じられる程です。(このケアにつきましましては、利用されたご父兄に本紙に感想を掲載させていただきましての目を通していただきたいと思います。)

また、今回の県省では、ショートステイの受け入れも可能な範囲で実施してまいりました。学校も休みに入り二十四時間自宅介護を余儀なくされ困っている状況にある方々も少なくないと思えます。施設機能の社会化・多様化という点では、これらの要望にだけ応えられかがこれから施設の課題ではないでしょうか。このように最近の学舎の県省中の様子は大変盛況だしくなっております。

開所して一年半となる訳ですが少しでも在宅福祉の一助となるように、また利用している寮生が安心してそのサービスが受けられるように拙いながらも努力している昨今でもあります。

「施設なんかに入っちゃって」ではなく、「施設を利用してよかった」と本当の意味で思える福祉づくりをお願いしながら暑かった今年の夏を振り返って見ました。

(指導主任)



レスパイトケアを  
利用して

安西 宣夫

毎年、子供の夏休みが来ると妻が憂鬱そうに、「ああ、また長い夏休みが来た」と愚痴をこぼすのが通例であった。これは、養護学校に通っていた息子に、四十日間生活の全てが縛られてしまうこと

を思いつたことだ。毎日、知的障害の息子の世話に追われるため、心にゆとりがなくなり、つい子供を叱つたりする。だから、家庭の雰囲気も壊れてくる。たまには家族で旅行し、気分転換を考えたみても息子中心となるため、行動範囲はもっぱら狭く県内であった。

ふる里学会に入ってから今年の夏休みは違った。今年の四月から通所部に通う息子が「レスパイトケア」を利用していただき、初めて例年になく県外旅行が出来た。高小生の娘の希望で、新幹線に乗り鳥羽を中心に志摩半島の宿泊旅行を満喫した。私も、妻も、娘も十分リフレッシュして日常生活へ戻ったのである。この様に生活にゆとりを持つことは、息子が家に戻ってきたとき、思いやりをもって接することができ、潤いのある家庭生活を取り戻す良い機会となつていける。

通所部に通う者のレスパイトケアは、試験的な試みと聞いているが、是非これを続けて頂きたいものである。前述させて頂いたように、妻を始め家族にとつて、拘束された生活から僅かでも解放されることは、生活に潤いを増すことであり、障害者を持つ家庭の絆をより強くするものと評価したい。

県や市の制度上の規制があるにせよ、良いことは良いのであつて規制されることなく実施できるようなにしたいものである。我々親もこのために出来る努力は、惜しまないつもりである。

(通所生・真宣の父)



